

令和5年度 第40回全国高等学校体操競技選抜大会

【男子体操競技審判員報告】

審判長 佐々木 彰文

1. 採点上打ち合わせた事項

①適応規則の確認

2022年版採点規則

男子体操競技情報31号

②採点の指針について

③新技申請

なし

④監督会議連絡事項

適応規則の確認

Dスコアに対する質問について

2. 採点上おこった事項とその処理

特になし

3. その他 特記事項

ルール変更前の年となる今大会において、ルールや情報等がしっかりと浸透しており、特別な問題もなく競技会が行われた。Dスコアに対する問い合わせは、各種目において数件あったが技の認定条件からの逸脱ということからクリアな判定だったと感じている。大会開始前の審判会議において、Dスコアの数値に関わらず、素晴らしい演技、減点ができない実施には素晴らしかったといったEスコアでの表現をしてほしいという思いであったり、それとは逆に、時に選手が意図する技の認定とはならなかった場合、また厳しい評価であったとしてもそれは将来に向けて選手を強くすることでもあり、そして日本を強くすることにも繋がるといったことも今大会に参加された審判とともに共有する内容の審判会議を行った。

競技全体を通してDスコアはさほど高くはないが、各種目において非常に丁寧な技捌きや、着地に対する意識や強化が進んできていると思われる実施が多く散見された。しかし日本の弱点でもあるつり輪においては、静止技における最終姿勢への持ち込みの肩角度の逸脱・最終静止位置の姿勢不良や静止時間の不足等が散見されたのも現状であった。

今年のパリオリンピックはもちろんのこと、これからを担う選手たちにとってロサンゼルス・ブリスベン大会といった今後のオリンピックも視野にいれ、更なる強化が必要であるとともに、より美しく力強いといった日本をこれからも表現できるように強化とともに取り組んでいけるよう努めていく。

1. 採点上の打ち合わせ事項

○2022年版採点規則、情報31号の確認

- ・種目特有の評価ポイントの確認
 - ① 雄大なアクロバットの跳躍技の先取りのある安定した着地を評価する。
 - ② 宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
 - ③ グループIの旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。
 - ④ コレオグラフィ的な動きを意識し、リズムカルにフロアエリア全面を使用した演技を求める。
- ・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。
- ・ニュートラルディダクションの確認。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・マンナI-3において、後ろに転倒した実施を不認定とした。
- ・組合せにおいて、2つ目の技において大過失を伴った実施には加点を与えなかった。
- ・前方伸身宙返りで腰や膝がまがり、明確な伸身局面が見られない実施は前方かかえ込み（屈身）宙返り（A難度）と判定し、組合せ加点を与えなかった。
- ・静止が求められている技において、静止が見られない実施は不認定とした。

■NDについて（54演技中）

- ・ライン減点 11件
- ・タイム減点 3件
- ・2回宙返りなし 1件
- ・技数減点 1件

3. その他特記事項・意見・感想等

54演技（0.00実施を除く）中5.0以上のDスコアは20演技、8.00以上のEスコアは17演技であり、Dスコア5.0以上でEスコア8.00以上は10演技であった。

Dスコアの最高は5.8で1演技（昨年と同様）、組合せ加点を伴う演技実施は33演技（昨年度：34演技）、そのうち2回宙返りを含む実施が1演技（昨年度：2演技）であった。2回宙返り技においては、D難度以上を2種類実施したのは3演技（昨年度：5演技）であった。

Eスコアで8.50以上の得点であった演技は4演技であり、いずれも技の正確性や着地準備を含め安定した着地姿勢が見られた。一方、NDとなるライン減点やタイム減点の数からも伺えるが、シーズン始めの競技会ということもあり十分な調整に至らなかった選手も多く見られた。宙返りや着地での足の開き・空中姿勢・ひねり不足・着地準備・着地と1つの宙返り技で複数の減点項目に該当する選手が多く見られるなど、演技実施において未完成であると感じられる実施が見受けられた。

4月以降の大会に向けて、雄大な宙返り技で先取りのある安定した着地、宙返りひねり技での正確な実施、グループIでの丁寧で美しさを表現する捌きなど、技術の向上と雄大かつ美しい実施を意識した練習に励んでいただき、成果が発揮できることを期待する。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版採点規則および体操競技情報31号の確認（技の認定と減点項目について）
- ・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
- ・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに倒立に持ち込む捌きを評価する。
- ・演技全体を通して、安定感のある実施を評価する。
- ・大きさのある片足振動技を評価する。
- ・8技未満の構成は技数不足の減点（ND）が発生する。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・交差横移動技において、脚部、臀部で馬体を支える実施は不認定とした。
- ・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続かずに落下したものは不認定とした。（少なくとも半周旋回後の明確な背面支持がみられれば認定。）
- ・フロップ/コンバイン技において途中で落下したものは、すべて不認定とした。
- ・倒立下りにおいて、上げる際に大きく肘が曲がった実施は不認定とした。
- ・倒立3部分移動270°ひねり下りにおいて、バランスを崩して途中で下りた実施はC難度を認定した。

■Eスコアについて

- ・縦向き3部分移動技において、手のズレがみられたものは一部分毎に減点をした。
- ・下向き転向（移動）技において、脚開きなどの姿勢不良がみられたものは一転向毎に減点をした。
- ・片足振動技に入る際の単純な入れ抜きの大きさのない実施は一回毎に減点をした。
- ・旋回技の腰の曲がりは一回毎に減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

昨年の5月からコロナが5類に分類され、多くの観客を入れ大会が実施されることは本当に嬉しい限りである。2022年版採点規則も今年最後となり、世界選手権が終わる事にその内容も少しずつ変化をして、減点が厳しくなっている部分や緩和されている部分がある。あん馬における減点として縦向き旋回の減点が肩角度から手のズレによる減点に変化したことは大きく点数に影響してくると考えられる。今回の55演技中縦向き3/3移動（前後ともまたは片方）が入っていたのは43演技であった。減点がない実施はないもののその技のどこかの旋回は減点がないという実施も多く見られた。交差倒立技は4演技であった。実施にはまだまだ課題が残る実施が多いが諦めることなく練習を積み重ね演技に組み込んでもらいたい。多くの選手が交差技は正交差（A難度）を実施していたが雄大な実施はなかった。今回落下の件数は20演技であり、複数回落下した演技は4演技であった。今大会非常に多かった減点は馬体への接触であった。特に触れる（0.1）減点が積み重なっているという印象を強く受けたため高い位置での旋回となるよう今一度旋回の質にこだわった取り組みを期待している。

大会全体を通して大過失、中過失は多かったもののDスコアを高めようとしてきている演技を多く感じた。今後はそれらに加えて、技の正確性と安定感を高めることとさらなるDスコアアップを期待している。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版採点規則の確認。
- ・力静止技における静止時間は厳密に対処する。
- ・力静止技における角度逸脱に対する減点の確認。
- ・ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさが大きい場合の減点の確認。
- ・倒立位で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整などの減点について。
- ・各々の演技は、理想とする完璧な演技を基準に評価される。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・後ろ振り上がり十字懸垂やけ上がり十字懸垂、またホンマ十字懸垂で持ち込む際に45°を超えた角度の逸脱があった場合は不認定とし、その後の十字懸垂が要件を満たした場合は十字懸垂(ⅡB)のみ認定した。
- ・中水平支持(2秒)において静止が認められない実施は不認定とした。
- ・ほん転倒立(2秒)において倒立の静止が認められず、背中側に倒れてきた実施は不認定とした。
- ・ヤマワキ(ⅠC)やジョナサン(ⅠD)において回転途中で支持局面があった場合は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

Dスコアの最高は5.7(昨年度:5.2)、平均は4.35(昨年度:4.19)であった。また、Dスコアが5.0以上の演技については、昨年度3演技のみだったが、今大会は6演技であり、Dスコアを高められていると感じる。

Eスコアの最高点は8.35(昨年度:8.10)であった。平均は6.96(昨年度:6.70)で、Eスコアの性質から考えると、ほぼ横ばい傾向であった。

高い評価を得られた演技については、共通して以下の点が挙げられる。

- ・倒立技でロープへのタッチが少なく、安定した倒立で実施している。
- ・力静止技において、明確に2秒の静止を実施している。
- ・演技全体として輪の揺れが少ない。
- ・安定した着地とその準備曲面を有する。

実施については苦しい選手が多いと感じたが、一方で終始安定した演技を披露する選手も増えて来ている印象を受けた。しかしながら、今大会で終末技の着地を止めた演技は6演技と決して多くなかった。着地の出来映えが最終的な得点に対して明確に反映されるので、その重要性にも着目する事が必要だと感じる。

安定した倒立、そして不足の無い静止時間を十分に意識し、夏の全国高校総体ではさらに磨き上げられた演技を期待する。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022 年版採点規則および体操競技情報 31 号の確認
- ＊第 1 局面での足の開きに対する減点
- ＊美しさ・雄大性を表現した演技実施
- ＊ひねり不足や空中姿勢の腰まがりや膝まがりの実施について
- ＊着地前の先取りが行われているかどうか
- ＊意識的に着地を止めた実施かどうかの見極め
- ＊腰高な着地や腰の位置が低い着地の評価について
- ＊競技直前練習でのウォーミングアップの本数についての確認

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・雄大で高さのある跳越技を評価した。
- ・ひねり不足や着地準備等は厳密に採点した。
- ・伸身姿勢での跳越技において、腰をまげた屈身姿勢や膝まがりは相応の減点を行い伸身姿勢の跳越技として判定した。
- ・ラインオーバーに対する問い合わせがあった(1 件)。線審に確認したところダイレクトに片足が出て、その後にライン内に入ったことが確認できたためその旨を伝えた。表示された ND の変更はなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

全体を通して E スコアは伸び悩んだ印象を受けた。また、例年よりも跳越技のバリエーションが少ないように感じた。D スコアの最高点は 5.2、E スコアの最高点は 9.20 であった。その中で、上位入賞を果たした跳越は、姿勢こそ減点される部分はあったが着地までしっかりまとめて完成度の高いものであった。高校生の段階から大きな試合で着地までまとめ、自身の力を発揮することは、今後の選手生活にかなりの自信となるであろう。今後も夏の大会に向け、D スコアの高い跳越技、踏切から着地までの課題克服に努め、雄大で高さがあり余裕を持って着地に持ち込める演技を期待したい。

■実施された技の分布 (55 名)

グループ	跳越技名	価値点	人数
I	ドリッグス	5.2	10
	アカピアン	4.8	24
	伸身カサマツひねり	4.4	8
II	前転とび	1.6	1
III	伸身カサマツ	4.0	10
IV	伸身ユルチェンコ 1 回ひねり	4.0	2

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022年版採点規則・男子体操競技情報31号の確認。
- ・肘、膝、腰が伸び、正確な倒立位を表現し、腰高で安定した終末技を行った演技を評価する。
- ・静止技における静止時間（2秒）不足を厳密に減点する。
- ・実施された技がコントロールされずに（器械上に）落下したものは不認定とする。
- ・後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーの支持局面で大きく肘がまがる実施は不認定とする。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「マクーツ」で大きく肘のまがった実施を不認定とした。（1件）
- ・「ティップルト」で、脚部がバー上にのった実施を器械上の落下とし不認定とした。（2件）
- ・「伸腕屈身力倒立」で静止が見られなかった実施を不認定とした。（1件）

3. その他特記事項・意見・感想等

Dスコアの最高は5.8、平均においては4.4（昨年4.3）、Eスコアの最高は9.05、平均7.77（昨年7.53）であった。今大会において終末技の着地においては、56演技中53名の選手が後方（かかえ込み or 屈伸）2回宙返り下りを実施し、転倒したのが7名と例年より少ない傾向にあった。しかし、着地が止まった演技は3演技（昨年4演技）とまだ少数であるため今後の成長に期待したい。また、平行棒では脚前挙支持（2秒）、後ろ振り倒立（2秒）、伸腕屈身力倒立（2秒）という3つの技に2秒の静止が要求されている。今大会においては、こういった静止時間が必要な技においての静止時間不足減点に抵触する捌きが多くあったように感じた。日々の練習からこういった減点とならないように意識して取り組む必要がある。

コロナ禍の影響により、思うように練習ができなかった世代の選手たちにとってその伸び代は大きいと感じる。今後の大会に向け課題の克服に努め、一つひとつの技に静と動のきめを意識した実施や雄大かつ美しい演技となるよう期待したい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2022 年版採点規則の確認。
 - * 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技を評価する。
 - * 美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。
 - * 着地への準備局面を有し、意識的に止められる終末技を評価する。
- ・ 雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。
- ・ 倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。
- ・ その他
 - * 演技開始の振り出しにおいて 3 回を超えたスイングは減点
 - * 手放し技や終末技の前の車輪での膝まがり実施減点
 - * 倒立になる、または経過する技の角度逸脱について範囲の確認
 - * 手放し技でバーを握る際の腕のまがり、身体の歪みは減点

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 伸身トカチェフでバーを越える前に著しい腰のまがり（45° 以上）があった場合は、屈身トカチェフ（C 難度）と判定した。
- ・ 「余分または中間的な支持」として手放し技後のけ上がり、エンドーにおいて余分な握りかえを実施した選手に対し減点とした。
- ・ ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン（B 難度）と判定した。
- ・ 手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、バーを握る際に腕のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

2024 年のスタートとなる大会でもあることから落下や転倒が全体で 11 件と多く、演技全体の完成度、習熟度の低さが感じられる大会であった。

D スコア 5.0 以上の選手は 3 名（昨年 5 名）、最高 D スコアは 6.2（前回 5.3）D スコアの平均値は 4.25 となった。E スコアについては、最高が 8.60 であり平均値が 7.54 であった。着地に関しては止まった実施が 13/57 名であった。その内容をみると後方伸身宙返り下り 1 名・後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り 11 名・後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り 1 名であった。D スコア、E スコアとともに最高は市立船橋高校の角皆選手で演技構成や完成度、質の高い素晴らしい実施であった。

全体の所感としては、単純な手ずらしが多いように感じられた。1 演技内で複数回手をずらす選手もいたため、その都度減点が発生した。手放し技においても空中姿勢やバーを握った際の膝や肘のまがりも多く見受けられた。トカチェフを実施する選手が多くいたが、車輪での膝まがりや切り返しのない実施も多く、伸身トカチェフの予定が屈身という認定になってしまう実施も多く見受けられた。全経過において体の伸びた伸身姿勢での実施を心がけてほしい。また、閉脚エンドーや閉脚シュタルダーを実施する選手も多く見られたが、足を入れた際の柔軟性の不足やバーへのタッチもしくはヒットが見受けられ減点が多い実施がほとんどであった。

鉄棒においてダイナミックな手放し技や終末技が目立ちがちであるが、これからは担う選手たちにとって単純な手ずらしや倒立位での角度減点にも目をむけ脚先まで意識された美しい鉄棒の演技を期待している。